

☆ 総合授業力リーダー「名場面集」 ☆



「さぬきの授業 基礎・基本」

実践事例集別冊Ⅱ

平成27年3月
香川県教育委員会

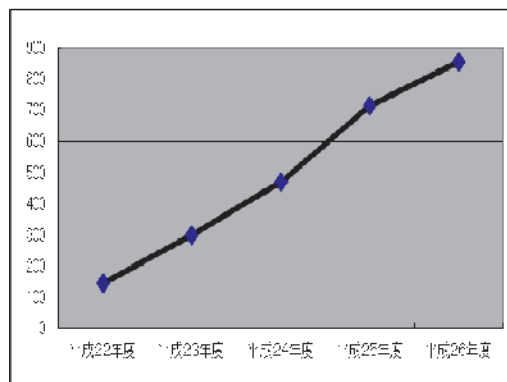
目次

I	はじめに	2 p
II	名場面集	
○	さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-1「考える力」を育てる指導	
	・「子どもの課題意識を高める」とは?	3 p
	・「子どもが自分の考えを表現する場を設定する」とは?	11 p
	・「考える力を育成するための言語活動を充実する」とは?	16 p
○	さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2「話し合う力」を育てる指導	
	・「聞くことから始める」とは?	25 p
	・「話し合いの課題を明確にする」とは?	26 p
	・「話し合う必然性を高める」とは?	29 p
	・「話し合いを効果的にさせる手立て」とは?	31 p
	・「話し合いの苦手な子どものためにひと工夫する」とは?	33 p
○	さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-3 個に応じた指導	
	・「授業前に子どもと教材を把握する」とは?	35 p
	・「子どもを学習に向かわせる教師の関わり」とは?	37 p
III	おわりに	38 p

I はじめに

本冊子は、「さぬきの授業基礎・基本 ～子どもに学びのときめきを～」(平成 25 年 3 月 香川県教育委員会発行)の第Ⅱ章に書かれている指導技術の基礎的・基本的な内容を総合授業力リーダーの先生方が、小・中学校の現場で具現化した実践を「名場面集」として紹介する事例集です。

総合授業力リーダーは、県教育委員会が委嘱している教科等の授業力の高い先生方のことです。平成 26 年度は、下記の案内を配布し、特定の教科等(小学校：国語、社会、算数、理科、生活、図画工作、家庭、体育、道徳、外国語活動、学活 中学校：国語、社会、数学、理科、音楽、保健体育、技術、外国語、道徳、学活)計 35 名の総合授業力リーダーに、県内教員の授業力向上に資するため、授業を公開していただきました。上のグラフの通り、大変好評で、年々参観者が増えています。



【SJL 公開授業の参観者数の推移】

※H26 年度は、H26 年 12 月現在の数

本冊子では、公開実践を「名場面集」として紹介します。



授業力の向上を目指す教師のために・・・

わくわく わかる わらい
3つの「わ」がある授業は、みんなを元気にします

総合授業力リーダーの授業を参観しませんか？

教師の最も重要な仕事は、「授業」です。
授業力を高めるには、優れた授業を数多く観て具体的なイメージを得ることが大切です。
そこで、県教育委員会では、授業力の優れた先生方に〔総合授業力リーダー〕を委嘱し、公開授業&討議をお願いしています。

子どもたちが学びのときめきに胸躍らせる、そんな授業を創るための一歩を、総合授業力リーダーと一緒に踏み出してみませんか。



※ 参観を希望する場合、授業1週間前までに当該校へ電話で申込んでください。
※ 「さぬきの授業 基礎・基本」をご持参ください。

【参観者の声】

- むだのない発問・助言で考えさせる「問」が絶妙でした。大変参考になりました。
- いつか、こんな授業がしたいという目標が見つかりました。
- 「即、明日まねてやってみよう」という元気と、子どもに向き合う勇気をいただきました。

Ⅱ 名場面集

さぬきの授業 基礎・基本 Ⅱ-1 「考える力」を育てる指導 「子どもの課題意識を高める」とは？

小学校第4学年 社会 「ごみの処理と利用」

視点Ⅱ-1 「考える力」を育てる指導の実践提案は、四箇小 篠原 正義 先生。

本実践の概要：最終処分場に埋めるごみの量を減らすためにできることを、ごみの流れ図を基に話し合うことを通して、ごみを極力出さない生活をしたり、資源ごみをきちんと分別したりすることの大切さに気付くとともに、それらの取組は地域全体で協力していく必要があることを理解する実践。

しつとりと落ち着いた雰囲気の中、篠原先生がやさしく問いかけ、授業が始まりました。

「多度津町のごみは、どこに運ばれてどんなふうに処理されていきましたか？」

「最終処分場がいっぱいになったら、どうしますか？」
(地図上で処分場を増やして見せ、ごみを減らさなければ、という反応が出たところで)

「処分場を長持ちさせる方法を考えてみますか？」

(自力解決後「リデュースすれば」という意見に)

「例えば、どういうこと？」

「同じような意見の人がいたね。」

(分別されていないごみ袋を見せながら)

「このごみは、このまま捨ててかまわない？」

(分別した後、)

「ごみが何に変わったの？」

このように、学習活動1つにつき、必ず主要発問が1つ、きちんと準備されていて、問題解決の骨組みがしっかりしていると感じました。しかも、非常に聞き取りやすいスピードで語りかけるので、ますます子どもの集中力が高まっていました。

また、抽象化された資料と具体的なごみの分別を関係付けるなど、抽象から具体へ、具体から抽象への往還が巧みなので、グラフ1本、矢印1つの意味を子どもたちがしっかり認識していました。だから、子どもたちは、流れ図のごみの量を表す矢印が細くなったり、リサイクルされたものが生活に返ってくる矢印が太くなったりすると、自然と歓声が上がっていました。友達の意見に対して、「あーあーなるほど」とつぶやいたり、質問したり、自然と拍手が起こったりする子どもの姿を、大変ほほえましく感じました。

討議では、たくさんの質問が出ました。副読本中心に展開していること、一問一答



にならないよう子どもが知りたがっている順に、資料提示の順番を吟味していること、似た意見を固めて反応を組織していること、もし期待する反応が出なかった時の準備をしていることなど、大変参考になる話をしていただきました。



視点Ⅱ-1 「考える力」を育てる指導の実践提案は、宇多津小 山崎 宏美先生。

本実践の概要：数量が増減する場面で、変量に目を付けまとめて計算する場合において、演算決定した理由を話し合うことを通して、図の変量を表す矢印が逆向きの時は差し引きすればよいことに気付き、いくつ増加（減少）するのかを考えて解くことができるようにする実践。

向上心をもって学び続ける先生だからこそ、学び続ける子どもが育つのだと感じさせられる実践でした。山崎先生は、子どもの側に立ち、つまずきはどこにあるのか、なぜ、つまずくのか、どんな手立てが必要か、と深く教材分析をしていました。

例えば、本時、「もらった8」と「食べた3」のオペレータ（8増3減）に着目させたわけですが、子どもにとって8と3の求差の関係は理解が難しいものです。それは、8と3が並んだ図を見ても、8-3の関係と見抜きにくいからです。8の一部である「もらった3」と「食べた3」が相殺されることに気付かせる必要があるのです。

そこで、山崎先生は「食べたから引く」とキーワードで立式するのではなく、図の矢印の向きに目を付け、普遍の真理である「同じ向き（増増・減減）だから足す、逆向き（増減・減増）だから引く」と数量関係そのものに目を向けさせたいと強く願いました。

そして、前時に布石として、減減の場面を設定したり、本時、あえて教師（T2）が誤答を示し、問題を焦点化し、間違いを指摘する中で理解を深めようしたり、手の動作化やオノマトペ等の表現により、場面毎のオペレータ（増増、減減、増減）の違いに気付かせたりしていました（「前はへりへりで合わせてバイバイだったよ」「今日はふえへり問題だ」）。

さらに図を、式の説明するためのツールとして位置付け、立式の根拠をしっかりと話し合わせました。その際、赤白帽で自分の意見や役割を示すようにしたり、図と式をつなぎやすいように、式に①②とナンバリングするとともにそれにあたる図にもナンバリングしたりしました。また、増は赤矢印、減は青矢印と表させ、視覚的にも理解を助けようとしました。また、8と3を入れ替え8-3の「3」は食べたから引いているのではなく、増減の向きが逆だから引いていることにも気付かせようと試みました。1対1対応が見やすいヒントカードも有効でした。



討議では、つまずく度に既習に返られるよう揭示が充実している等、既習とのつながりが評価されました。山崎先生の熱意が広がり、討議が終わっても、山崎先生のたくさんの自作教材を囲んで、話が尽きることはありませんでした。

視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、**亀阜小 川地 由美 先生**。

本実践の概要：キャベツやホウレンソウを使った「もう一皿の野菜料理」の試しづくりをすることを通して、食品の組み合わせや調理方法（ゆでる、いためる）、味付けの仕方等によっていろいろな料理になることに気づき、「野菜食べん県」返上を目指した一食の献立作りに取り組む実践。

調理も試食も言語活動も時間がかかるので、1時間の中で全てを充実させるには、よほどの教師の力量が必要です。一人ひとり異なる一品料理をペアで作るならなおさらです。川地先生は、**子ども力（何ができて何ができないか、何をがんばらせるか、どこでつまづくのか）を見極め、また何が大切かという教材の本質（何を教えねばならぬのか）を見極める**ことによって、それが可能であることを示していただきました。

きめ細やかで温かい配慮の基、しっかり子どもに思考させることはぶれず、譲らず指導し、期待値をあげて求め、鍛えます。**安易な妥協は許さず「もっと面白いことを考えてごらん」「食べるだけで終わり？」と問い返すこと**で、何度も課題に立ち返らせます。

また、調理では、**手伝うところはポイントをおさえて指導し、大胆に任せることはしっかり任せます**。子どもたちは、各自が目的意識をもって自分の問題解決に取り組み、何をしてよいのかが分からない子どもが一人もいませんでした。指示がなくとも調理と並行して片付けも行ったり、検食を作ったり、**できた料理を和食と洋食の実物大写真シートの上に置いてデジカメで記録**したりする子どもの姿に、体験の積み重ねと学び方の育ちを感じました。

川地先生は、**転ばぬ先の杖を準備せず、ボールとざるが準備できていないことをあえて指摘しない等、小さな失敗は経験させて自ら気付かせるとともに、きめ細やかに子どもを把握し、計画と異なる調理をしている子どもには「あなたたちは塩で味付けだったんじゃない？」、アレルギー体質の子どもにはそっと「あなたが試食できるのはここここ」と助言する等、懐深く子どもの成長を見守っていました**。本当の自己有用感は、ただほめるだけではなく、こういった鍛え見守る環境の中で育つと感じました。



討議では、**国語と関連させ「野菜食べん県」の新聞記事をもとに、単元の動機づけを行ったこと、ペアが交代で調理することで、本時を踏まえて次時はより効率よく取り組めること、2年間のポートフォリオを各自に持たせ、自分の成長を実感させ、家庭との連携に活用していること、2年間の学習で、「いつ・どこで・何を」学ばせるのか見通しをもち、計画的に「調理の計画・準備・実践・振り返り」を繰り返し経験させていること等、大変参考になる話をしていただきました**。



視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、玉藻中 桑島 哲治 先生。

本実践の概要：夏と冬で販売されているレタスの産地が異なることから「なぜ香川県では、夏に長野県（川上村）産のレタスが販売されているのだろうか」という学習課題を作り、高松市との比較から予想を考えた上で資料を調べ、分かったことを関連付けて「川上村は第一次産業に従事する割合が高く、標高が高く気温が低いので、レタス栽培に適しており、他の産地と違う時期に栽培できて高く売れるため」と「自然環境」と「産業」の視点から考察する。さらに、「歴史」や「交通」の視点から川上村でレタス栽培が盛んな理由を追究する実践

導入で提示した「レタス」や「産地が書かれたレタスの箱」といった実物資料に加え、地図資料、高松市と川上村の雨温図、レタス栽培の条件を示した文章資料、栽培カレンダー、レタス畑の映像、生産者の写真、生産者のインタビューVTR、川上村の年表等々、本実践では、**課題解決のための豊富な資料が用意されていました。桑島先生自身が、高松市の市場や現地である川上村に出向いたり、役場で資料をもらったりと、足で稼ぐ教材研究が光りました。**

また、資料が多いと、情報過多や活動過多になりがちですが、桑島先生は、日頃から学び方・調べ方を指導している上に、**一貫して学習課題の解決というストーリーにそれぞれの資料を位置付けている**ため、子どもたちは目的意識を見失うことなく予想に照らして資料を調べることができました。

さらに、資料を提示し子どもに新しい事実と出合わせる時、子どもの反応を見るために机間指導をしている時、**桑島先生の表情はとても生き生きして楽しそう**なのです。地図の小黑板をのけると、黑板の手書きの地図が現れる等のユーモアも忘れません。**先生自身が社会を調べることを楽しんでいる**ことが、学び続ける姿として子どもによいモデルを示し、子どもの意欲を喚起していました。また、**地図帳で川上村を見つけて印を付ける活動や山地・山脈の名前を書き込む活動等、地理的分野としての基礎的・基本的な活動も大切に**していました。

このような考える力を育てる授業が成立する理由は、事後討議で明らかになってきました。まず、足で稼ぐ教材研究もさることながら、**常日頃から桑島先生自身がニュースや新聞に関心をもち、教材化の視点からいつかのために、膨大な資料を蓄積・整理**

していることに驚きました。また、集めた資料の単元への位置付けを、**単元全体の全体像「学習内容構造図」を作成する**ことにより明らかにしていました。この構造図は、桑島先生のオリジナルで、理解が難しい中部地方の特徴を「地域による主要産業の違い」としてとらえ、北陸、中央高地、東海地方を横軸に、農業、工業を縦軸に位置付けたマトリックスになっており、それぞれを比較することによって特色に気付かせようという意図が伝わってくる見事なものでした。



中学校第1学年 数学 「一次方程式」

視点Ⅱ-1 「考える力」を育てる指導の実践提案は、飯山中 西原 弘子先生。

本実践の概要：操作活動を通して、三角形をつくることのできる3つの辺の長さの関係に見通しを付け、三角形をつくることのできるか否かの境目を、方程式 ($a + b = c$) を用いて説明し伝え合う実践。



「筆箱から文房具を3つ出し三角形を作りなさい」
まず、導入に操作活動を設定することで、柔らかい雰囲気の中、子どもの授業への参加意欲を高めていました。また、西原先生は小学校の教科書の表現を引用して発問したり、ノートを見れば誰でも答えられる発問で復習させたり、と子どもの立ち位置から授業をスタートすることを心がけていました。これらのことは、子どもたちに自信をもたせるとともに、本時の学習への意欲を喚起することにつながっていきました。小学校との系統を意識することで、ずいぶん子どもは「できる」「できそう」という気になるようです。さらに、表情豊かにグループや個人を称賛していることも、子どもが自信をもって発言することにつながっているようでした。



子どもが考察対象を把握するための操作活動があり、結果を予想し、解決の方針を立て、説明し合い、条件を変更して発展的に考えるという、問題解決的な学習が成立していました。操作活動を通して、「最も長い辺の長さが、他の2辺の長さの和と等しくなる時を探すんだ」という見通しが子どもの中で明確になっていることが、子どもの思考を活性化しているようでした。



また、6人の生活班でのグループ活動は、互いの距離が遠いため話合いが成立しにくいものですが、ホワイトボードを各班に2枚ずつ配布し、班をさらに3人ずつの小グループに分けたことで活発な話合いとなりました。

また、結果の見通しを立てる場面では、正答や特徴的な誤答に加え、「分からない」という選択肢を設定したことで、子どもの実態をより正確に捉えることができていました。



討議では、本時のことだけでなく、常日頃、心がけていることにも話が及びました。「先生に質問できないことも友達には尋ねやすい。机間指導の後は、グループの中で教え合えるように助言している」等のアドバイスに熱心にメモをとる参加者の姿が印象的でした。

視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、太田中 茂中 則子 先生。

本実践の概要：電流計を正しく接続し、直列回路と並列回路を流れる電流の大きさを測定し、実験結果をもとに話し合うことを通して、電流の概念についての基礎的な知識や技能を身に付ける実践。

表情や雰囲気柔らかく、子どもの安心感が伝わってきました。自分の考えを表現することは、不安を伴うものですが、一歩踏み出し、自分を表現する勇気を茂中先生が支えていました。

例えば、実験前に一人一人が回路図に配線をかき込み、実験の見通しを立てる活動では、すぐにフィードバックができるよう、タイミングよく一人一人に正答である回路図を配布し、安心感を与えていました。また、言葉に詰まった時には、「うまく表現できない時は、数式でもいいよ」と、言葉を補う方法を助言していました。

このように、「間違っても大丈夫」という温かいメッセージを伝える一方で、鍛えるべき時にはしっかり鍛えていました。例えば、確かな考察のためには、自分なりの予想や正確な実験結果が不可欠です。このような場面では、しっかり表出を求め一人一人の問題解決を保証していました。

回路の各所を流れる電流の強さは変化するか否かを予想する場面では、全員が考えを表出することを求めます。「自分は異なる考えをもっているのに黙っている」という状態を作らないように努めていました。具体的には、1つの予想が出たら、同じ意見の者の挙手を求めます。そして、異なる意見をもつ者を起立させ、発表を促します。さらに同意見の者から着席させていきます。

また、実験は子どもが納得するまでやり直しをさせます。先生が「きっと、誤差でしょう」と相対化してしまうのではなく、子どもに最後まで粘り強く真理を追究する姿勢を求めています。

さらに、ノートの自分の考えは、自分の言葉で書かせるようにし、修正は朱書きを加えさせることで、はじめの考えを消させずに、正答にたどり着くまでのプロセスの大切さを伝えていました。

このように、子どもの納得を大切にすることが結果を基に考察する力に結び付くことがよく分かりました。



討議では、「時間のある限り考察に結び付くデータを自分たちの手で獲得させたい」「苦労して得たデータには子どもの思い入れもできる」という強い願いを語っていただきました。



視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、**屋島中 清水祥行先生**。

本実践の概要：水難事故についての実習を通して、傷害の発生要因について考え、傷害の多くは、その要因に対する適切な対策によって防止できることを知り、備えや事故発生時および発生後の状況に応じた安全な行動、情報の把握によって防止できることを学習する実践。

水難事故の防止策・対処法を考

死亡原因	10~14歳	事故死の内訳
全体		
1位 がん	1位 事故死 21.9%	1位 交通事故 37.2%
2位 心臓病	2位 がん 21.0%	2位 火災 29.1%
	3位 自殺 11.4%	3位 水没 10.7%
	4位 心臓病 7.6%	4位 溺死 9.1%
		5位 転倒・転落 9.1%
		6位 その他 5.8%

まず、清水先生は、**客観的なデータを基に話し合わせることを通して、子どもの課題意識を耕して**いきました。

具体的には、全体の死亡原因の多くは、がんや心臓病などの病死であること、10~14歳の死亡原因は、病死よりも事故死が多いこと、その事故死の中でも水死は、交通事故に次いで多いことを、順を追って段階的にとらえさせ、水難事故が、子どもにとってより身近な問題であることを意識付けていきました。



実習として行われた活動も、段階的でした。まず、何も持たない状態で、2分間浮き続けることにチャレンジする。次に、ライフジャケットやペットボトルなどの道具を持って浮き続けることにチャレンジする。さらに、道具を交換して浮き続けることにチャレンジしてみる。



こうすることによって、それぞれの方法を比較しながら、救助が来るまで水に浮き続ける有効な方法について、考えが深まっていきました。

プールサイドから、プール全体に広がって活動する子どもに、指示を伝えることはなかなか難しいものです。しかし、清水先生は、活動の切り替えや道具のローテーションなどについて、的確に指示を伝えていました。常日頃からの子どもとの約束事や学び方のルールを徹底していることがうかがえました。



事後の討議では、授業者からライフジャケットを使った教材開発について、常に学習内容について問題意識をもっていたことが開発につながったことの説明があったり、参観者から、実習の条件設定についての質問が多く出されたりしました。

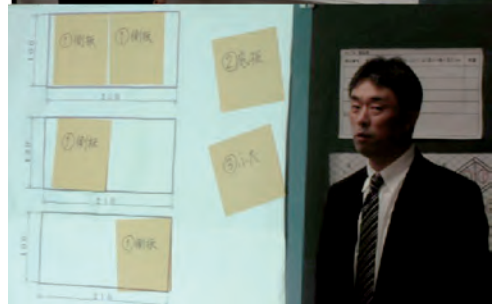
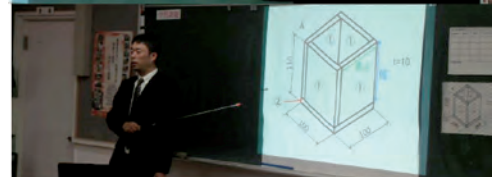
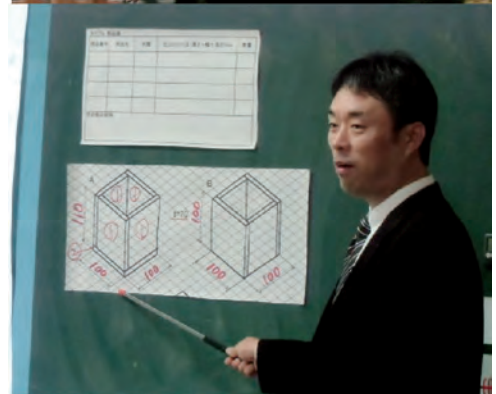
視点Ⅱ-1 「考える力」を育てる指導の実践提案は、善通寺西中 松原 貴 先生。

本実践の概要：完成品（箱A、箱B）の実物や等角図をもとに、部品表や木取り図を作成することを通して、材料を無駄なく効率よく活用するためには、接合部分をよく観察して寸法を部品表に記入したり、削ったり切ったりする作業回数をできるだけ減らすよう木取り図を描いたりすることの大切さに気づき、製作工程の見通しを立てる実践。

「今日から、本格的に作品製作に取りかかりましょう」という松原先生の第一声に、「やった！」と拍手がわき起こりました。質問や気づきを積極的に発表したり、「なるほど」「じゃあ、Aの箱は裏板がないということか」とつぶやいたり、と子どもたちの非常に素直な反応が印象的でした。

松原先生は、まず完成品の箱を分解して見せることによって、完成品と部品との関係を見える化しました。板どうしを両面テープでとめていたので、何度でも組み立てと分解を繰り返すことができました。この教具の工夫が、子どもの理解を助けていました。また、材料と部品、部品と完成品を視覚的に関係付けることが、子どもの作業の見通しにつながっているようでした。

次に、松原先生は、作品製作の経験はあるものの、図面は描いたことがない子どもの実態から、図と実物がつながらなかつたり、作業の見通しがもてなかつたりするつまずきを想定して、「部品とは何か」「Aの箱とBの箱との組み立て方の違い」「各部の名称」などの基礎的・基本的な事項をICTを活用して、一つ一つ丁寧におさえていきました。事前のアンケート調査を丹念に分析し、子どもを把握しているからこそその支援でした。このように、思考に必要な知識をきちんと整理した上で、無駄なく効率よく材料を利用するために、どのような部品表や木取り図が必要かを考えさせました。子どもたちは、接合部分をよく観察して「厚みを寸法に入れるか否か」、「板同士をくっつけて木取りすべきか否か」をよく吟味していました。



討議では、「構想図と部品表、木取り図を関連付けられるワークシートの工夫がよかった」「難しい用語や手順をICTを活用して視覚的にとらえさせていた」「教具が参考になった」「完成図から部品表を考える場面に思考があった」などの意見が出ました。

さぬきの授業 基礎・基本 II-1 「考える力」を育てる指導 「子どもが自分の考えを表現する場を設定する」とは？

小学校第4学年 音楽「重ねてつくろう すてきな音楽 ～一枚の紙から～」
視点II-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、城西小 太田 雅子 先生。

本実践の概要：紙から出すことのできる音の組み合わせ方を考えて、グループごとにリズムアンサンブルを創作する実践。

自然と拍手が沸き起こる場面がたくさんありました。紙で作る音ですから、よほど静かにしていないと、聴き合うことはできません。しかし、「聴きたい！」「学びたい！」気持ちにあふれている子どもたちは、よく聴き、そして笑顔で友達のがんばりに拍手を送っていました。

はじめ子どもたちは、前時までの学びを生かし、基本のリズムに音が被さらないように、2つ目のリズムをつくっていきました。基本のリズムにある休符に目を付け、そこにタイミングよく音を入れて2本目のリズムをつくったのです。さあ、3つ目のリズムをつくろうとした時です。太田先生が静かに問いかけます。

「困ったことはないかな？」

「…あっ、もう隙間がない！」

そうです。どの小節も基本のリズムと2つ目のリズムの音で埋まってしまい、3つ目の音を被さらないよう入れられないのです。しかし、太田先生は、そこでつまづくことを読み切っていたのでした。そして、「実は、2つ目のリズムづくりの時にその問題をもう解決しているグループがあります。聴いてみますか？」聴きたくなるような助言でした。付箋紙を持って机間指導していた理由が分かりました。

「音の長さを変えて重ねています。」「休符をたくさん書いています。」と、気づきを話し合う中で、①伸ばす音を重ねる、②休んでいて時々重ねる、の工夫を見出していきました。さらに、「木片の音楽」の演奏のDVDを見せ、「同じリズムの繰り返し」も重ねられることにも気付かせました。

「紙の音でアンサンブル」は、子どもをわくわくさせるだけでなく、演奏技術等の技能面を簡略化し、「音色」「リズム」「音の重なり」に焦点化することで、考えたり表現したりする時間を生み出していました。騒がしくならない上に、困ったときは何度も演奏してみて、音の重なりを試せる良さがありました。試しの演奏が子どもの思考の拠り所になっていたのです。

「ぜひ、取り入れたい」と、参加者の関心も高く、事後討議では7人も質問が繋がっていきました。また、「グループ活動後、進捗状況を尋ねたのがいい」「まとまりごとに色を変えているのが分かりやすい」などきめ細やかな支援も評価されていました。



視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、長尾小 松岡 清美 先生。

本実践の概要：友達とより仲良くなるための心を見つけるために、資料「およげないりすさん」（香道研）を読み、気持ちを吹き出しに書いたり、ハートの色で表したり、役割表現したりする活動を通して、仲間外れをした側の後悔する気持ちに気付き、仲間外れをしないための工夫を考え、友達を大切にしようとする気持ちを高める実践。

深い教材研究に基づく洗練されたむだのない授業運びの中、よく鍛えられた子どもたちが、活躍します。45分の中に**ハートの色塗り2回、気持ちの記述4回（①りすの悲しい気持ち、②3人の楽しくない気持ち、③りすに謝罪する手紙、④学んだこと）、リスの表情の書き込み1回、役割表現3組と、自分の言葉で豊かに心の内面を表現しました。**その1つ1つが思考の伴う非常に充実した活動になっていたのは、驚きでした。これだけの言語活動を充実させるには、**よほどの発問・助言の精選と子どもの反応を読み切る力**が必要です。

特に、その場にいなりすを思う3人の楽しくない気持ちを想像するのは、2年生にとって容易なことではありません。そこで、松岡先生は、**その前の場面で「泳げないことはだめなことなの？」「できないことがあると、みんなと遊べないの？」と仲間外れにされた「りす」の気持ちをおさえました。**そのことが、3人の楽しくない気持ちを役割表現することの布石となっていました。

役割表現では、ワークシートをもたせずに即興表現を大切にしていました。松岡先生は3人の中の1人となって役割表現に参加しました。「**楽しくないね。どうしてかな**」「**りすさんは今頃どうしてるかな**」「**これからどうしたらいい？**」と、吟味された普段使いの言葉でゆさぶりを、本音を引き出しました。子どもたちは、緊張感の中で、1つ1つよく考えて言葉を選んでいました。そこには、子どもの成長を信じて待つ松岡先生の姿がありました。



討議では、地域や保護者と共に進めてきた息の長い実践を紹介していただきました。また、参観者からは「動物たちから仲良くなるための大事な心を見つけよう」と**読み物資料を、自分たちの生活をよくするための手段として位置付ける授業構成や「教師の本気が子どもを変える」という教師の構え、構造的な板書や「私たちの道徳」の具体的な活用の仕方等、大変参考になった**という声が聞かれました。



視点Ⅱ-1 「考える力」を育てる指導の実践提案は、**山田中 香川 久仁子 先生**。

本実践の概要：視力検査に使われる「ランドルト環」について、実際に視力検査をしたり、環の大きさを測ったりすることを通して、視力検査表の中にある関数関係を見出し「距離と視力との関係」や「環の隙間と視力との関係」を、比例、反比例の考え方で説明し伝え合う実践

子どもが授業開始3分前に着席し準備をする等、**「さぬきっ子学びの三訓」が子どもの姿で具現化されていました。**日々の教科経営の積み重ねが本時の授業を支えているのがよく分かる実践でした。

日常的に子どもが目にしていてランドルト環（視力検査で用いる「C」）を手元において比例と反比例の特徴を見出したり、振り返ったりすることで、それぞれの関数の表・式・グラフの特徴を、実感をもって捉えることができていました。全国学力・学習状況調査の課題を踏まえた教材開発でした。また、**表・式・グラフの特徴を構造化した板書も子どもの理解を助けるのに有効でした。**

さらに、**簡単・明瞭でポイントを押さえた発問・助言が光りました。**例えば、

「どうして、このグラフが比例のグラフだと言えるの？」、

「どうして、この関係が反比例になると考えたの？」

等、子どもに判断の理由を問う場面が豊富にありました。その際、正解が出たり、同じ考えであったりしても、さらに続けて発言させることで、より理解を深めることができていました。

また、間違いやすい部分をよく把握しており、「 $y = 1/5x$ は、 $y = ax$ の形になっていますか」と、丁寧に確認したり、「〇〇を表の下側に書きましょう」、「〇〇をグラフの中に書きましょう」と具体的に指示したりするなど、先生の発言が子どもによく伝わっていました。その上、**言葉使いも丁寧で、香川先生自らが言語環境を整えている**ことが、子どもの活発な言語活動につながっていました。



討議では、若い先生方が中心になって活発に話し合われたということが、この公開授業の価値を物語っていました。「間違いを嘲笑しない支持的な雰囲気の中、授業が進められていたこと」、「考える時間と作業する時間の区別ができていたこと」、「今日の学習がよくわかる板書であったこと」など、「さぬきの授業 基礎・基本」に基づく意見が多数挙げられました。

視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、**玉藻中 小山 順子 先生。**

本実践の概要：リズムよく様々な課題や読み方で音読練習をすることを通して、技能の統合を図る実践

導入での前時の復習は、非常にスピーディーかつ効率的でした。2～3分ごとにメニューを変え、歌、速音読、Bingo、30秒スピーチなど、6つの活動を決められたルール・順序（板書に目標・活動内容・進捗表示）に従って軽快に行いました。授業規律が徹底している上に、子どもにとってルーティンとなっているのでしょう。戸惑うことなくどんどん活動を進めていました。それが終わると、小山先生は、**使っていたワークシートやノートを一旦、机の中に片付けさせました。**活動への切り替えを、言葉だけでなく、身の回りの環境を変化させることで子どもに意識付ける効果がありました。

次は本文の音読です。とかく単調になりがちな音読練習を、語数、スピードなど**音読の難易度を徐々に上げ、子どものチャレンジ精神を刺激します。**1語読み、ペアでのチャンク読み、その後のグループ読み、ステップアップ読み、といった活動のバリエーションがあったり、デジタル教科書を使って文字と音を一致させたり、時間制限を設け緊張感を与えつつも変化を持たせた飽きさせない工夫が印象的でした。**個々のレベルに合わせたワークシートの工夫も秀逸でした。**4つの難易度（英文のみ、日本語交じり、英語の語順の日本語、日本語のみ）から子ども自身が選択し、音読練習に取り組みます。英語が苦手な子どもには仮名を振ることもあり、特に配慮を要する生徒に積極的に声掛けをし、全員に授業に参加させようとする工夫がありました。そして「どしたん、やるやん」と**信頼関係が伺える飾らない言葉で賞賛します。**仲間の前で恥をかかせない工夫も印象的でした。

このように、「いかに集中力を維持させるか」に意をはらい、**課題の与え方がバリエーション豊かで、しかもタイミングよく賞賛**するので、30回程繰り返した音読も全く飽きることなく取り組んでいました。最後に短期記憶した英文を書くことで、確実に力の付く活動になっていました。

まとめでは、教師の前で音読し個別に評価します。**スタンプを与えて賞賛し次時への意欲付けを図りました。**「さぬきの授業 基礎・基本」にある「活動欲求」「達成欲求」「承認欲求」「競争欲求」「親和欲求」の全てが満たされているようでした。



討議では、授業規律に悩む参観者に、小山先生から「ユニバーサルデザインの視点を授業に取り込むこと、そして綿密な授業デザインをすることで生徒の興味を持続させることができる」とのアドバイスがありました。討議終了後も質問の列ができるほどの盛況ぶりでした。

中学校第1学年 美術 「色って何？」(色彩の魅力)

視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、紫雲中 梅木 眞由美 先生。

本実践の概要：クイズ形式で自然物と人工物の配色を比べ、配色から受けるイメージの違いに気づき、ワイシャツとネクタイのコーディネートをしたりお好み焼きのVTRを視聴したりすることを通して、身近なものの配色のよさや美しさを感じ取り、色彩について関心を高める実践

配色だけで自然物や人工物を想像させる「これは何の色？」クイズでは、子どもたちは想像の翼を広げ、自由な発想で様々な意見を楽しく発表していました。梅木先生は、すべての意見を取り上げ、間違った回答も、連想するヒントになっていることを価値付けしていたので、発言しやすい雰囲気が出ていました。クイズに答えていく中で、子どもは「自然物は、豊かな色使いで飽きない。人工物は、色数が少なく、色がはっきりしていて割合が似ている」ことに気付いていきました。

次の活動は、ドラマチックでした。上段の黒板に隠していたカラフルなワイシャツとネクタイが登場し、教室の雰囲気ががらりと変わりました。子どもたちは、色によって空間世界が変わっていくことを実感し、色彩の魅力を楽しもうとする意欲が高まっているようでした。

また、色紙(トータルカラー；日本色検93色)を活用し、ワイシャツとネクタイを選択することで、子どもは自分で色を作る技能を簡略化することができ、自由にイメージを広げることができました。

さらに、友達のコーディネートと見比べることを通して、友達の意見を取り入れたり、独自の組み合わせを作ろうとしたり、試行錯誤しながら充実した思考活動が活発に行われていました。

お好み焼きが次第に出来上がるVTRを視聴したのも、色を与える効果を考える上で、非常に有効でした。単色から食材が加わる度に色の組み合わせが段階的に変わり、食欲を刺激します。さらに、梅木先生は、VTRに登場する担任の先生の服装が「お好み焼きコーデ」であることを明かします。きっと、子どもたちは先生の服装など、これからの学校生活の中で色を意識し始めるのだろうな、と感じました。



討議では、「子どもは発想を広げ思考を楽しんでいた」「鑑賞して感じたことを表現する場がたくさんあった」「すぐに感じたことを記録できるようワークシートが工夫されていた」などの意見が出ました。長年積み上げてきた実践に、さらに磨きをかけてよりよいものを求める梅木先生の姿から、教師の学ぶ姿勢こそが子どもの学ぶ意欲を育てるのだと感じました。



さぬきの授業 基礎・基本 II-1「考える力」を育てる指導
 「考える力を育成するための言語活動を充実する」とは？

小学校第4学年 国語 「わたしの考えたことを友だちに伝えよう」

視点II-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、綾上小 植田量子先生。

本実践の概要：身近な出来事や日常生活を振り返り、問題意識をもって自分の考えを書く言語活動を通して、自分の考えを読む人に分かりやすく伝えるための文章の組み立て方や書いた文章を推敲する方法について考える実践。



まず、植田先生は、「だれに伝えたいか」をはっきりさせました。そのことによって「低学年の子に伝える時は、簡単なことばで書かないといけない」など、相手意識・目的意識が高まりました。

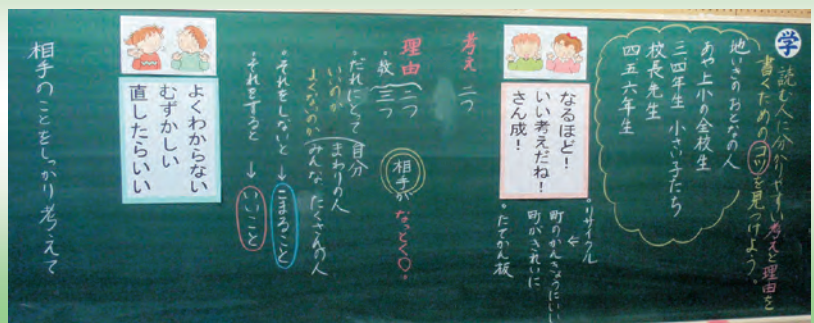
そして、伝えたい相手毎にグループを編成し、お互いに文章を推敲しました（友達の意見文のコピーを持ち、それを読んでのアドバイスを付箋紙に書いて伝える）。思考の材料が手元にあることで、子どもたちは考えやすかったです。



グループ活動では、子どもたち同士が分かりにくいところを活発に質問し合いました。質問されることで、改めて文章を見つめ直し、修正しようとする場面が多く見られました。さらに、「Aさんの書きぶりは上手ですね。同じように、『もしそれをしないと…なる』という書き方をしている人を見つけてみよう」という助言により、思考がより深まりました。

まとめでは、「理由をたくさん書くと分かりやすい」「『なぜかという』という言葉を使うとよい」など、それぞれが見つけたコツが発表されました。

参観された先生方から、「相手意識をもたせる大切さが分かった」「この時期の子どもは、『事実』と『自分の考え』を混同しがちだが、植田学級は、よく理解できていた」（→「文末に気をつけて書くよう指導しています」との植田先生の返答）などの意見が出され、事後討議も充実していました。



視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、府中小 白川 恵美子 先生。

本実践の概要：教科書の教材文において、伝えたい結論「ごみを減らすには、一人ひとりの努力が必要」をより説得力のあるものにするために、2つの資料を選び、説明し合うペア対話を通して、選択した資料や資料の順序によって、伝わるメッセージや説得力が変わることに気付き、総合的な学習の時間にそれぞれが書いた府中町の紹介文の校正に生かそうとする実践。



子どもたちは「教科書にあるから教材文を学ぶ」のではなく、「府中町の良さを分かりやすく伝えたいから、教材文を学ぶのだ」という目的意識をはっきりもっていました。だから、学習係は見通しをもって司会進行や板書ができたのだと思います。形ではなく、本当の意味で自ら学び自ら考える主体的な学びが、そこにはありました。

みんなの意見と異なっても、堂々と意見を主張する子ども。ペア対話でしっかり聴き、資料同士がつながっているか、結論とつながっているか、をしっかり相手に伝える子ども。振り返りで「資料の順序を変えて吟味するとよい」「現状がわかるインパクトのある写真を先に、データを後から提示するとよい」など、自分の言葉で学んだことを自ら板書する子ども。

このような個の育ちの裏には、白川先生の大胆できめ細やかな手立てがたくさんちりばめられていました。例えば、読みの単元と書きの単元を複合させ、なおかつ総合的な学習の時間と関連付けることで、子どもたちの迷いつつ書いたり話したりする時間を確保していました。そして、教師の言葉を減らし、子どもが自ら踏み出す一歩を期待し、しっかり待つことを心がけていました。また、任せるだけでなく、言語活動のモデルを示し方向付けをしたり、「これでいいのかな、と自分の表現を不安に思ったときは、どうすればよかったのかな」と学び方を育てたり、としっかり子どもの学びに寄り添っていました。日々、鍛え育てる積み重ねを感じさせられる実践でした。



事後討議では、「教科書に終始せず、入れ子型の展開で、最後に府中町の紹介文を見直したのがよかった。ワークシートの構造が同じだったので、学んだことを活用しやすかったと思う。教科書を学ぶのではなく、教科書で学ぶ具体を見せていただいた」と絶賛でした。討議終了の際、自然と湧き起こる拍手が印象的でした。

視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、檀紙小 稲田 耕一 先生。

本実践の概要：太平洋ベルト以外の工業地域として北陸工業地域を取り上げ、鯖江市のめがね工場の様子を調べ、豊田市の自動車工場と比較することを通して、鯖江市では100年前からベテランの職人さんが手作業でめがねのフレームを生産していることに気付き、地図帳をもとに北陸工業地域は職人技で生産される伝統工業が多いという特色があると類推する実践

1つの社会的事象（めがね工場）だけを見つめても見えなかったものが、もう1つの社会的事象（自動車工場）と比べることで、新しい発見があります。異なる点からは鯖江市のめがね工場ならではの特色が、同じ点からは、工場として共通する普遍性が見えてきます。稲田先生は、既習である自動車工場と**自ずと比較思考が始まるように、ワークシートや板書を構造化していました。**子どもたちは、歴史や工場の規模、部品、働く人、生産の様子視点に沿ってどんどん調べを進めていきました。しかし、教科書の資料だけでは情報量に限界があり、働く人や生産の様子がよく分かりません。稲田先生はそのことも**予め見越していました。絶妙なタイミングで、子どもたちに静かに語りかけます。**

「分からないところがある人は手を挙げてごらん」そして、教科書資料を補うVTRを提示しました。しかも、**ストップモーションを使ってポイントをおさえていきます。**子どもたちは、分からない、知りたいという意欲を高めた上で、知りたい情報にポイントを絞って視聴することができました。

個々の調べをグループで情報交換し、具体的なイメージを広げた後は、視点を絞って特色を言葉でまとめしていきます。よい授業は、拡散思考と収束思考を繰り返すものですが、ここで**視点を2つ選択させ、ぎゅっと鯖江市のめがね工場の特色を言葉で表現させていきます。**子どもたちは、その歴史の長さや熟練した職人の手作業で生産していく様子に関心が集まり、「職人技」というキーワードを使ってまとめを表現していきました。さらに、めがね工場調べの見方・考え方を活用して、今度は、北陸全体に目を向けさせます。子どもたちは、地図帳に丸を付けたたりシールを貼ったりして調べ、伝統工業の多さという北陸工業地域の特色をつかんでいきました。



討議では、集中して調べたり友達と交流したりする子どもの育ちや資料を活用して事実を丹念に調べる活動などが高く評価されていました。

小学校第1学年 生活 「たのしさいっぱい あきいっぱい」

視点Ⅱ-1 「考える力」を育てる指導の実践提案は、川岡小 丹羽 枝里子 先生。

本実践の概要：秋の自然や身近な材料を使って秋らしさが伝わるおもちゃ（どんぐりごま、けんだま、めいろ、どんぐりロケット、どんぐりマラカス）を工夫して作ったり、互いの工夫を話し合ったりすることを通して、気付きの質を高める実践。

「場、きっかけ、しかけさえあれば、そもそも子どもは考える能力をもっている。本当に困った時には頼ってくる。だから、教師は信じて待つ姿勢が大事」この言葉どおり、環境を整え、任せ見守る子ども観が伝わってくる授業でした。

自分のめあてを発表し、おもちゃを工夫し、その中で見つけた互いのよさを話し合う。そして、「今日の発見」を振り返る。非常にシンプルな活動の中に、子どもたちが生き生きと活動し、たくさんの気付きを豊かに表現できる丹羽先生のしかけがありました。振り返りの時間には、言葉にすることを急がず、一度絵に表したことで

「オレンジや赤や黄色を貼ると、秋らしくなった」
「〇〇さんが、葉っぱを貼ってよくなった」
「テープより糊の方がきれいに仕上がった」
など、豊かな表現を引き出しました。丁寧に体験を言語化していくことの大切さを改めて感じました。

おもちゃを工夫して作る時間には、丹羽先生の的確な子ども理解と助言が光っていました。一言一言が子どもの心に響き、表情がぱあっと明るくなるのがよく分かりました。

例えば、「剣玉をするのを見て」という子どもには「ひもを長くしたんだね」（→昨日との作品の違いに気づき、見てほしい気持ちの背景を捉えた助言）、「葉っぱを貼りました」という子どもには、「トンネルの所だよね。よくできてたよ」（がんばりをよく見取っている助言）、「どんぐりを作る！」という子どもには、「今日のあなたのめあては、そうだったかな」（→あっ色塗りだった！とめあてに気付かせる助言）と、子どもの何気ないつぶやきから、一人一人の願いをよく把握し、昨日との違いという視点で子どもの成長を見つめているのがよく分かりました。また、「時間だから作業をやめなさい」という指示・命令ではなく、「もうちょっとやりたい気持ちでいっぱいですね。でも短い時間でよく進んだよ。一度、手を止めて前を向きましょう」と、常に「共感」から伝えていたことも丹羽先生の助言の特徴です。「いつも」をよく知っているからこそ「いつもの違い」に気づき、共感できるのだと思いました。



討議では、「子どもを認めることが、伸び伸びと自分らしく思考する礎になる。子どもの表現物を同じような物と見るか、違っていて素敵と見るか、教師の気持ち次第」「教師が子どもの心を無くさなければ、見えてくるものがある」等、貴重なお話をいただきました。

小学校第6学年 理科 「電気とわたしたちの暮らし」

視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、加茂小 金関 太郎 先生。

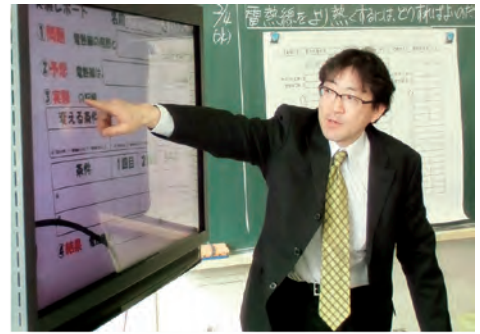
本実践の概要：電熱線を熱くする方法を予想し、変える条件、変えない条件を吟味して3つの実験を行い、結果を考察し、電熱線を熱くする方法には、電池を増やす、電熱線を太くする、電熱線を短くするなどがあることを理解する実践。

条件を変えながら正しく3つの実験を行い、正確なデータを得、結果からの確かな考察を行いまとめるということは、複雑で難易度の高い活動です。しかし、金関学級の子どもたちは、1つ1つの課題に躊躇することなく取り組み、見事にやり遂げました。**主体的、探究的に実験することが、子どもたちにとって日常のことなのでしょう。**笑顔で取り組む姿を見て、よく鍛えられているなあと感じました。また、**教材提示装置を使った実験道具や実験方法の説明も分かりやすく、何のためにどのような手順で行うのか、という見通しがしっかりもてていたように思います。**そこには、失敗してもいいんだよ、という温かい支持的学級風土を背景に、金関先生のきめ細やかな環境設定と、強いこだわりがあるのを感じました。

例えば、**3つの実験ごとに3枚のワークシートを用意していました。**それぞれのワークシートには、実験の目的に応じて、変える条件と変えない条件や結果を分かりやすく記入できるような工夫がありました。

また、結果を考察する際、数値の違いをだいたい同じとみるか、違うとみるかで、結論が大きく変わってくる場合があります。そこで大切なのは誤差についての認識です。金関先生は、それを分かりやすく子どもたちに捉えさせていました。電熱線がロウを溶かす時間を**2人組で計測させ、3回の平均値を記録させていました。**その上で、自分の実験結果のみから考察させるのではなく、**結果を全体で共有させました。**具体的には、**ロウを溶かした時間を黒板の表に磁石で貼らせてグラフ化し、標本数を増やし、磁石の分布をもとに考えさせることで、客観性を高めていました。**そのことによって、子どもたちは、誤差を踏まえた上で、それぞれの条件による結果の違いを的確にとらえることができました。

さらに、「今日、何をしますか?」「どんな予想がありましたか?」「変える条件が電池の数なら、変えない条件は何になりますか?」と**発問が簡潔、明瞭だったり、「結果」と「分かったこと」と「考えられること」を区別して発表させたり**したことも、子どもの思考を高めていたように思います。



討議では、教材についてや2人組での実験などに、高い関心が寄せられました。

視点Ⅱ-1 「考える力」を育てる指導の実践提案は、一宮中 齋藤 紀子 先生。

本実践の概要：物語「盆土産」を4つの場面に分け、それぞれの場面における父親の土産「エビフライ」のもつ意味を話し合うことを通して、貧しくとも温かい家族の絆を読み取る実践。

ぴりっとした緊張感の中にも、齋藤先生の子ども愛、国語愛にあふれる実践でした。愛情に裏打ちされた真理を求める厳しさとは、かくあるべき、と教えていただいたように思います。

考える力を育てるために、安易な考えやあいまいな表現をよしとせず、言葉にこだわり、あくまで自分の言葉で語らせることを徹底していました。

例えば、単語でぽつりぽつりと答える子どもに「今、言ったことをつないで文章で答えてごらん。結局、誰のために何を取りに行っただの？（子どもは、帰省する大好きな父親のために、生そばの出汁になる雑魚をとりにいったと答えた）」と助言したり、「分からないことを分からないと言ってくれるから嬉しい」と励ましたりしていました。

「あなたならできる！」と子どもを信じ切る姿がそこにはありました。簡単なことではありませんが、子どもと向き合い、子どもを信じ、子どもの表現を待つことによって、「考える力」を育てる言語活動が充実するのだと感じました。

また、指示を聞き逃したり話題に乗り遅れたりしている子どもを支援したり、学習意欲の低い子どもへタイミング良く声をかけたりするなど、個に応じたきめ細やかな指導が行き届いていました。学習対象から意識が外れつつある瞬間を捉える眼力が素晴らしく、個に対して、これ以上ない絶妙なタイミングでの確かな声かけを行ったり、意図的な指名をしたりと、集中力を切らさないようにするコーディネートが見事でした。



授業後の討議では、齋藤先生から単元開発、指導案の立て方、授業の構想の仕方、グループ活動や発言の取り上げ方など、指導技術について丁寧に説明していただきました。「まず、板書から授業を組み立ててみる」「(子どもの発言を上手く活用するためには、) 納得いくまで、掘り下げて子どもに尋ねる」など、実践に裏打ちされた齋藤先生の哲学とこだわりが伝わってきました。参観した先生方から、「大いに刺激を受けた」といった声が聞かれました。

視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、**善通寺東中 西角 貴子 先生。**

本実践の概要：阿氏河荘の百姓申状の役割演技をもとに、「農民」「荘園領主」「荘官」「地頭」「幕府」「朝廷」「国司」の関係を関係図に表現することを通して、農民が幕府からも、荘園領主（あるいは朝廷）からも二重支配を受け、苦しんでいたことに気づき、丸亀市に「地頭」「領家」という地名が並んで残っている理由について、二重支配を解消するために下地中分等が行われたのではないかと推論する実践

西角先生は、挙手を求める際、自ら元気よく手を挙げます。そして、明るく楽しそうな笑顔で接するので、話しかけられた子どもも自然と笑顔がこぼれます。「先生、こう?」「あっわかった!」と素直なつぶやきが聞かれ、強い信頼関係を感じました。

導入の時事問題を含む3択クイズが子どもが現実社会や歴史への関心を高めるきっかけになっていました。5分間で3問。市長の名前や地頭という用語を答えます。楽しいウォーミングアップでした。

「阿氏河荘の百姓申状」は、読み解くのにかなり難しい資料です。そこで、西角先生は次のような手立てをとっていました。

まず、音読した後、「**ただ、このままで分かる?」**と、**子どもの気持ちを代弁しました。そして、予め台本を渡していた子どもに、役割表現を指示しました。**子どもたちは、農民が荘園領主に宛てて、地頭への不満を訴えている書状であることや地頭の強い要求に苦しんでいたことを理解していきました。

次に、地頭や荘園領主と農民の関係を関係図に整理します。子どもたちは、ワークシートの穴埋めをしていきます。**その際もすぐに突き放すのではなく、関係図の意味をいっしょに読み取っていきます。矢印が支配を意味していること、色の違い（幕府・地頭は青、荘園領主・荘官は赤）や「荘」という言葉に目をつけること（荘園領主と荘官は仲間）など絶妙のタイミングで助言していました。**

さらに、身近な地域の例を挙げました。丸亀に「地頭」「領家」という鎌倉時代の二重支配の名残の地名が残っていること、善通寺の「吉田」がもともと「良い田」に由来しており、そこで下地中分が行われたこと、など**先生自身が足で稼いだ地域教材は、子どもの関心をぐっと高めていました。**



討議では「**穴埋めと自由記述の2種類のまとめを選択できるのがよかった**」「**地図の場所を特定する際、『直線で結んだ真ん中あたり』という説明がよかった**」「**語句を絞っているのが子どもが活躍できる**」などの意見が出ました。

中学校第2学年 音楽 「合唱を楽しもう」夏の日の贈りもの

視点Ⅱ-1 「考える力」を育てる指導の実践提案は、桜町中 岡田 誠司先生。

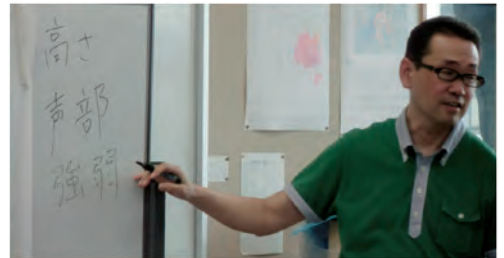
本実践の概要：曲の構成を理解し、旋律の抑揚や強弱の変化を感じ取り、合唱で山を表現する実践。



子どもへのアプローチが多彩で、しなやかでした。子どもの気付きを期待して待つものの、子どもにとってハードルが高い課題だと感じた時は、経験を掘り起こしたり身体表現からイメージを広げたり、具体物（花）を提示して「美しい」という歌詞を音読させたり、自ら山場を変えて演奏して聴き比べをさせたりと2の手、3の手が子どもの情動に確実にヒットしていました。子どもたちは、自然体のまま音楽の世界にどっぷり浸ることができました。手立ての度に、声量が大きくなったり、ためをつくったり、山場を盛り上げて歌ったりと、みるみる表現が豊かになっていく様は、まるで魔法の時間でした。

思考場面も充実していました。「一番高い、てっぺんの歌詞はどれでしょう？」の発問に、子どもたちは「山の」「贈りもの」「美しい」の3つの言葉を挙げました。そう考えた根拠を話し合う中で、音が高くなっていることや分かれていたパートが「美しい」の歌詞で合わさっていること等、音の高さ、声部、強弱等の音楽的要素と関連付けることで、気付きの質が高まりました。

また、発声練習の隊形、合唱の隊形、パート練習の隊形と、子どもたちがスムーズに移動している姿から、基礎となるルールや学び方が、約束事としてしっかり定着しているのを感じました。



討議での「男子に歌わせるには？」「女子に口を開けさせるには？」「声量を上げるには？」等々の質問に、岡田先生は、質問者に共感しつつ、本質を見極め、目的と手段を混同しないこと（手段にこだわりすぎないで時には期待値を下げる）、



「やり直して徹底」、「（実際に見せながら）音楽授業記録ノートを活用して、係を介して担任と連携すること」、「ア行で口を開けさせる練習にぴったりの曲は…」等々具体的で、貴重なアドバイスをいただきました。

視点Ⅱ-1「考える力」を育てる指導の実践提案は、三木中 藤澤 一恵 先生。

本実践の概要：資料を読み、ギネス記録「270人271脚で50m完走」を達成できたと喜ぶみんなに、ひもがほどけていた事実を告げるか否か、について、立場を決めて話し合うことを通して、「判断のその後」を考える大切さや自主的に考え誠実に実行する大切さに気付かせる実践。

「子どもたちに自分の頭で考え、自分で判断し、自分の口で意見を言うたくましさ育てたい」という藤澤先生の思いにあふれる実践でした。

葛藤・判断の場が思考を促進します。新聞記事を紹介し、ギネス記録を達成した時の気持ちやひもがほどけていることに気付いた時の気持ちに共感させた後、藤澤先生は、ピンクと青の2色のカードをアナライザーとして活用し、「もし、自分なら…」と、一人ひとりに自分で考え、判断する場を設定しました。そして、それぞれの判断の根拠について話し合いました。

(正直に言う派)

「ひもがほどけていたことを隠してまで、ギネスに申請しても幸せにはならない！」

(正直に言わない派)

「みんな達成して喜んでいるのに、正直に言うのは、自己中心的だ！」

(正直に言う派)

「本当のことを言って、『次、頑張ろう』とみんなが思わないなら、それまでの仲間だったということ。」

子どもたちは、「正直に話すことが、みんなが喜んでいるギネス記録を台無しにしてしまう。でも、本当に黙っていていいのか」と真剣に考え、話し合いました。藤澤先生は、あえて声を潜めて語りかけ集中力を高めたり、子どものつぶやきを的確に拾ったりして粘り強く支援していました。子どもとの温かい信頼関係の上に、明るく朗らかな藤澤先生の人柄が光る実践でした。

討議では、参観した先生方が、教材開発や授業終末のまとめなど、自らの悩みについて質問し、ざっくばらんな雰囲気でも語り合いました。計画的・意図的に実践を積み上げる大切さを確認することができました。



さぬきの授業 基礎・基本 II-2「話し合う力」を育てる指導 「聞くことから始める」とは？

小学校第6学年 図画工作 「私の富士山」

視点II-2「話し合う力」を育てる指導の実践提案は、満濃南小 宮脇美津子先生。

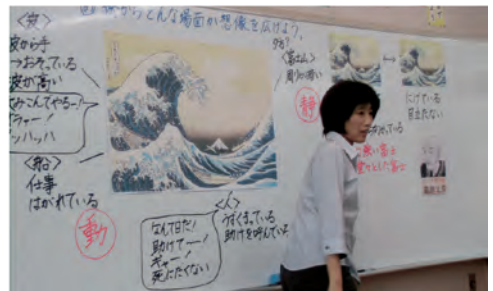
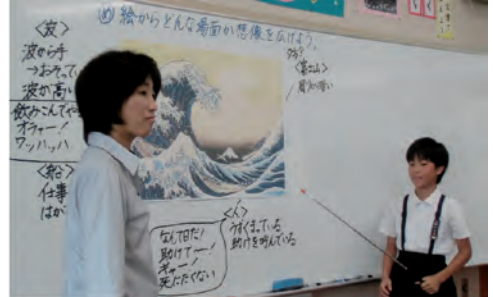
本実践の概要：「神奈川沖波裏」を鑑賞し、感じたことを話し合う中で波の激しさに気付き、さらに仮に富士山を中央に位置付けなかった場合と比較することを通して、激しい波の中央に富士山を据えた意味を「北斎は荒々しい波に負けない堂々とした富士山を描きたかったのではないか」等と想像させ、作品には作者の思いが詰まっていることに気付かせる実践。



自分と異なる意見を「なるほど、そんなふうにも考えられるのか。面白い！」と笑顔で聞き合う姿が印象的でした。子どもも先生も新しい発想や解釈を楽しみながら聞いているので、授業の終盤でも挙手率が下がりません。友達が発言を受け止めてくれる、つないでくれる、という信頼感が、発言する勇気を支えているようでした。

また、授業の設計が非常にしっかりしていました。意図的・計画的な仕掛けが満載でした。人物に目が向いている子どもに「なぜ、そんなに必死なの？」「その時、波はどんなことを言っている？」と、波に視点を転換したり、「波が襲っているものは他にもあるよ。」「北斎はたまたま見えたからここに富士山を描いたのではないはずだね。」と、富士山に焦点化したり、と子どもの反応を読み切り、いつ、どんなタイミング・間で発問・助言するのかをしっかりと準備しているのがよく分かりました。また、挙手しても、あえて指名せず間をとって一人一人に考えを持たせた上で、グループで話し合わせたり、挙手していない子どもを「あなたの感じ方を聞きたいな」と意図的に指名したり、さらに波の先を拡大して動作化させたり、富士山の位置を移動して見せたり、と子どもの思考の流れに沿った絶妙な支援が見事でした。

さらに、宮脇先生は、先生とのやりとり以上に、子ども同士のやりとりが充実するよう子どもを鍛えていました。深まっていない議論には「今の発言は前の人の意見につながってないよ。」、頓挫した議論には、「仮に、〇〇として考えを進めてごらん。」と投げかける助言が光りました。



事後討議では「写実的なものがよいという発達段階だからこそ、様々な見方・感じ方があることに気付かせる鑑賞の授業が大事」と授業者の宮脇先生の願いやこれまで積み上げてきた取組を聞くことができ、大変勉強になりました。

さぬきの授業 基礎・基本 II-2「話し合う力」を育てる指導 「話し合いの課題を明確にする」とは？

小学校第3学年 学級活動

「みんなが楽しめるハロウィンパーティをしよう」

視点II-2「話し合う力」を育てる指導の実践提案は、屋島小 向永 千寿先生。

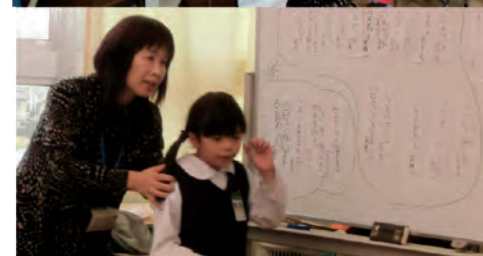
本実践の概要：みんなが楽しめるハロウィンパーティになるようにゲーム、仮装、飾りつけのアイデアを出し合い、限られた時間の中で具体的な計画について話し合い、折り合いをつけて集団決定をする実践。

心が洗われるような澄み渡る声で自作の学級歌が響き渡り、司会者の元気な号令で学級会が始まります。とてもよい表情です。向永先生は、にこにこしながらも、シャツの出ている子どもには、ズボンに入れさせます。ルールとリレーションのバランスがとてもよく、学級経営の基盤がしっかりしていると感じました。

まず、話し合いを始めるまでの準備が用意周到でした。計画委員会（司会グループ）を輪番制にしていたり、「決まっていること」を確認してから話し合いを始めたり、学級会コーナーには、議題や話し合いの柱が掲示されていたり、話し合いが充実するような環境設定が整っていました。日常的に学級会が子どもの手で進められていることがよく分かりました。

議論が停滞した時、教師の出番がありました。向永先生は、何のために話し合っているのかという目的を確認しました。表情豊かに「隣のクラスの友達が『わあ、いいなあ』と羨ましがるとような1組にしかできないパーティにするのだったね。」と語ることによって、子どもたちの顔がぱあっと明るくなりました。

学級会では、話し合った成果の実感がとても重要です。話し合っても何も決まらず、何も実現しないのでは、自分たちの生活は自分たちで創るという自治的な気運は高まりません。そこで、向永先生は、子どもたちが出してきたアイデアのうち、「ゲームについては、時間を短縮して全部やりましょう」と提案しました。そして、話し合いをどのように仮装するかに絞っていききました。このような簡略化・焦点化は、子どもの実態をしっかり把握していないとできることではありません。見事なコーディネートでした。



討議では、子どもの主体的な話し合いには時間がかかることが話題になりました。発達段階を見極めて適切に介入していくこと、子どもたちで解決できることはしっかり見守ること、カードに意見を書かせることで仲間わけをしやすくしておくこと、話し合いが始まるまでに環境を整えておくことなど日常化のために大切なことを話していただきました。



小学校第5学年 算数「順々に調べて」

視点Ⅱ-2「話し合う力」を育てる指導の実践提案は、栗林小 長谷川 友子先生。

本実践の概要：長方形の紙を折り進めていく具体的な操作活動を通して、2量の規則性を表に表すよさに気付き、「折った回数」と「できた長方形の数」（2問目は「折り目の数」との間のできる変わり方のきまりを説明し合う実践。

笑みがあり、拍手があり、「ちょっと待った！」と友達や先生に問いかける姿があり、学び合う喜びにあふれる授業でした。子どもたちは、算数の世界にどっぷり浸り、互いの考えを出し合うこと、聞き合うことを楽しんでいるようでした。

問題把握の場面では、子どもが自分の問題とする巧みな仕掛けがありました。

例えば、紙を配り問題文を部分的に示し、続きを子どもたちに語らせます。問題文を知っているのは先生だけのはずなのに、あえて先生が子どもに尋ねて題意を掴ませます。子どもは、紙を折る操作を基に想像を広げていきます。

長谷川先生は、終始この「あなたの考えをもっと聞きたい。教えて」という姿勢を貫いていました。このような教師の姿は、先生だけが答えを知っていてそれを子どもに情報入力するような授業とは違い、「知は子どもの中にある」という構成主義に立脚するもので、見事な指導技術と言えるでしょう。

また、「折ると変わるものは何？」と簡潔に発問し、長方形と折り目の数であることをおさえます。これが2問目の布石にもなっていました。

全体交流も、誤答や不完全な解答をたくさん取り上げ、指示棒をバトンのようにつなぎ、だんだんと全体の考えが高まるよう反応を組織していました。そのための仕掛けも見事でした。

1点目は、発表ボードに自分の考えを全て書かせて読ませるのではなく、途中まで書かせた状態で発表させることです。そうすることによって、考えながら、書きながらの発表となり、より相手を意識した発言となっていました。また、ノートに途中までしか解けていない子どもも、自分と同じ考えが黒板にあるので考え方のプロセスがよく理解でき、立ち位置を同じくして話合いに参加できていました。

2点目に、反応同士をつなぐのは先生の役割、と割り切っている点です。全ての発表ボードを並べてその関連を考えさせるのではなく、関連付けるストーリーを先生が作り、子どもは1つ1つの考えを理解するのに専念します。「〇〇さんが困ったこの問題を解決しようとしたのが、△△さんです。聞いてみたい？」と、つなぎました。

3点目は、誤答の取り上げ方です。誤答の中にある価値に光を当てたり「この考えを変身させると使えそうなんだけど…」と考える材料にしたりしていました。



討議でも、途中でつまずいている考えを進んで取り上げ、同じ段階でのつまずく子どもが活躍する授業や学級経営（ルールとリレーション）の素晴らしさについて話し合われました。



視点Ⅱ-2「話し合う力」を育てる指導の実践提案は、比地大小 三好 初代先生。

本実践の概要：アンケート結果や資料「まどガラスとさかな」、「わたしたちの道徳」の「心のつながり」をもとに、もし自分なら失敗した時に正直に謝れるか否かを判断し、その根拠を話し合ったり心情円盤で自分の気持ちを表現したりすることを通して、自分自身に正直であることの快適さに気づき、勇気をもって正直に謝ろうとする気持ちを高める実践。

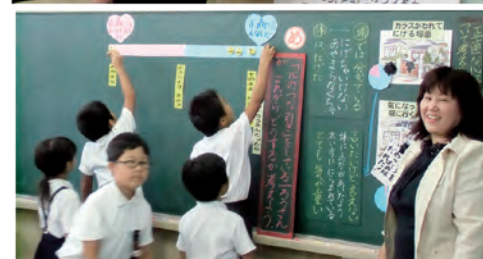
自分自身に正直であることの快適さを自覚するためには、正直であるからこそ、明るい生活が実現できるという価値理解が必要です。また、自分事として考えるためには、正直に言えない時があるという弱い心に共感する人間理解も必要です。そこで、三好先生は大きく3つの手立てを準備しました。

1つ目は、「心の綱引き図」による葛藤場面の可視化です。正直に言えない心と正直に言おうとする心の綱引きを赤青のテープ図で示し、自分の立場や判断をネーム磁石で表現させました。そうすることによって、自分と異なる判断をした友達の意見を聞いてみたいという話し合いのきっかけとなりました。また、「怒られる」「謝り方が分からない」「謝る自信がない」などの本音も表出することができました。さらに、学習終盤で再度、ネーム磁石を移動することによって、自分の変容を客観的に見つめることにもつながりました。

2つ目は、「心情円盤」による「快・不快」の表出です。ペアでの話し合いの後、正直に謝る役割表現の後等、話し合いの度、自分の心の内面を表現しました。正直に謝る役割表現を見た後、「見ている自分ももやもやした気持ちがすっきりした」と心情円盤をピンクにする子どももいました。

3つ目は、謝る場面を役割表現する「心の実験劇」です。謝り方が分からないという子どもへの支援となるばかりでなく、実際に謝ってみた時の自分の気持ちを見つめるよい機会となりました。

心の内面を素直に表現する子どもに個の育ちと三好先生の粘り強い取組の積み重ねを感じました。



討議では、「悪い時ではなく、良いことをした時に『なぜそんなことができるの?』と理由を尋ねる」「失敗した時、間違えた時こそ、『そういう時もあるよね』と人間理解が必要」「『あなたもそういうことがあったの?』と生活とつなぐ」等、学級経営で大切にしたい3つの助言についてお話いただきました。

さぬきの授業 基礎・基本 II-2「話し合う力」を育てる指導 「話し合う必然性を高める」とは？

小学校第6学年 理科「てこのはたらき」

視点II-2「話し合う力」を育てる指導の実践提案は、大野小 溝淵 豊仁 先生。

本実践の概要：左のうでに加える力の位置と大きさを固定して、右のうでに加える力の位置を変えていく実験を通して、てこが水平につり合うときには、(力の大きさ) × (支点からの距離) が左右同じになることを見つける実践。

きまりを見つけるためには、一度の実験ではなく何度もいろいろな場合を確かめて、たくさんの結果を得ることが必要となります。そこで、本実践では、てこがつり合うときのきまりを求めて「疑問→予想→実験」という問題解決の過程が繰り返されるよう、溝淵先生は様々な仕掛けを用意していました。

まず、子どもの疑問が連続するように、発問・助言によって子どもの問いを浮き彫りにしました。

「てこの左右が違ってもつり合う？」
「おもりが2個の場合は？」

と子どもの考えのあやふやな部分について尋ね、「実験して確かめてみたい」という気持ちを高めました。

そして、**予想では、子どもの自由な発想や考え方を大切に、結論をあせらず、きちんと実験結果に基づいて考えを固めてさせていきました。**子どもたちは、「支点からの距離が2分の1になった時におもりの重さは2倍になるということは、距離が3分の1ならおもりの重さは3倍になるはず」と、前の結果を次の予想へと考えをつなげていきました。実験結果をもとに次の結果を予想して調べ、また、次の場合を…と活動が連続していく中で、子どもの予想が徐々に確信へと変わっていきました。

また、実験における条件制御も見事でした。**左のうでの状態(位置とおもりの重さ)は変えずに、右のうでの状態を変えてつり合うところを見つけさせていました。**このように「揃えるところ」と「違えるところ」をはっきりさせることによって、実験の目的や視点が焦点化されました。

さらに、(力の大きさ) × (支点からの距離) が左右同じになるときにつり合うのではないかと考えが固まり出した頃を見計らって、**ゆさぶりをかけます。**支点の位置が中央になく左右のうでが不均一な「ほうき」を提示し「ほうきを

てこに使うとつり合う？」と投げかけます。子どもたちは自ずと見出した考えの正しさを説明しようと一生懸命になっていました。話型や場の設定以上に話し合いを促す効果的な仕掛けでした。

討議では、実験がうまくいかなかった時の対応や、考察とまとめの違いなど、たくさんの質問が出ていました。



小学校第4学年 体育「ポートボール」

視点Ⅱ-2「話し合う力」を育てる指導の実践提案は、林小 坂賀 俊之 先生。

本実践の概要：空間を意識した動きができ、しかもみんなが活躍できるように場やルールを工夫したゲームを通して、空間を意識した作戦を立て、その作戦をゲームに生かすことができることを目指した実践

まず、坂賀先生は「なかなかシュートが決められない」「勝ちたい」という子どもの思いに寄り添いながら、子どもの反応を取り上げ、「たくさん得点を取る」と「作戦」というキーワードを板書し、その言葉をつないで学習問題を設定していきました。そうすることで、子どもたちからは「あーあー、うん、うん」と共感する声が聞かれ、本時の目標を見事に捉えさせていました。

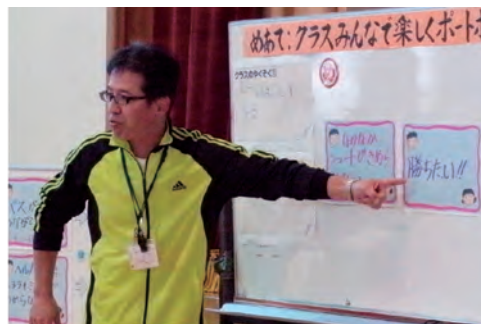
そして、作戦を考える際には、A「みんなが得点を取るための作戦」とB「シュートを成功させるための作戦」の2つを考える必要があることに気付かせました。Aの課題は、板書も作戦用紙も緑色で、Bの課題については、板書も作戦用紙も赤色で統一していました。何のために何を話し合っているのかを、ぱっと見て分かるよう視覚化することで、話し合いが活性化しました。さらに、みんなが作戦について理解できるように、内容を簡単な言葉に置き換えて共有化する働きかけがありました。

T：これって、どんな作戦なのかな？
C：パスするときに、もらう人が動いてからパスをもらうと相手に分かってしまうから、ここにパスを出すよ という約束をして、動く前にパスを出す。（作戦図を用いて説明するが、なかなか伝わらない。）
T：なるほど、人にパスをするのではなくて・・・
C：人がいないところ！
T：（動きを付けて）こうやって、人がいないところにパスをして、そこに走りこむんだね
C：うん（全員納得）
T：すごい作戦だね！

子どもたちは、その後の練習でも、実際のゲームでも、「人がいないところ」というキーワードを手掛かりに活動することができました。また、応援している子どもたちも、「〇〇さん、コーナーが空いているよ。」と、空間に目を向けていました。互いに声をかけあい、終始、夢中・熱中してゲームに取り組むことができました。



事後の討議では、「人間関係」「教材化」「評価」といった視点について、授業を基に話し合うことができました。また、子どもたちが頭も身体もフル回転させて、授業を楽しむことができていた点が特に評価されていました。



さぬきの授業 基礎・基本 II-2「話し合う力」を育てる指導 「話し合いを効果的にさせる手立て」とは？

中学校第1学年 国語「流水と私たちの暮らし」

視点II-2「話し合う力」を育てる指導の実践提案は、大川中 白河原 清香 先生。

本実践の概要：教材文「流水と私たちの暮らし」で学習した構成の仕方や接続語の使い方を生かして、友達の見意見を参考にしながら自分の書いた「私たちの環境と生活について」の見意見を改善していく実践。

身に付けさせたい内容が教師の中に明確であればあるほど、教師は多くを語ろうとする傾向が強くなります。しかし、白河原先生の授業では、必要最小限の言葉を的確なタイミングで生徒に投げかけていました。やわらかい口調で語りかけながら、自分が書いた意見文と時間をかけて生徒にじっくりと向き合わせる実践が行われていました。

全国や県の学習状況調査の結果から、根拠を明確にして自分の意見を書くことが苦手な生徒が多くいることが課題としてあげられます。書き方が分からないので途中であきらめてしまう、そんな生徒にも、最後までやりとげる満足感を味わわせたいという先生の思いが随所にうかがえました。

写真やグラフの資料を黒板に貼り、生徒の興味を喚起するとともに、授業の見通しを持たせました。次に、前時に書いた構成メモをもとに見意見を下書きさせます。そして、本時の山場では、グループで互いの下書きを読み合い、アドバイスをし合う場を設定しました。その中で充実した言語活動が実現するために、白河原先生は、大きく3つの手立てを講じていました。

1つ目は、場の確保です。教師の言葉を最小限に減らすことで、子どもが主体的に活動する時間をたっぷり確保することができていました。

2つ目は、話し合いの観点の明確化です。

白河原先生は、身に付けさせたい力に沿った話し合いを実現するために、①事実と考えの書き分け、②接続する語句の使い方、③文末の表現の3点を示し、観点を決めてグループで交流させていました。そのことで、何のために、何について話し合うのか、という話し合いの目的や方向性を共通理解することができました。

さらに**3点目は、個に応じた支援です。**困った時に立ち返ることができるヒントカードを準備し、「接続の言葉を選ぶのに困った人は、接続詞のヒントカードを使ってみましょう。」と助言していました。



討議では、「単元の構造を一枚の紙にまとめた学習計画シートについて、毎時間、身に付けたい力を記入する欄があり、学ぶ意欲を高めたり、学習の見通しをもって取り組んだりするのに、効果的だった。」といった意見が出ました。



視点Ⅱ-2「話し合う力」を育てる指導の実践提案は、満濃中 大平 希先生。

本実践の概要：命についてこれまで学んだ内容を確認し、一人を生かすために一人を犠牲にする分離手術をするべきか否かを両親の立場と子どもの立場から検討する。ネーム磁石によって立場を決めて討議することを通して、かけがえのない命を大切に考える考え方には様々あることに気づき、生命の重さについて考えを深める実践。

落ち着いた雰囲気の中、子どもたちの「葛藤」と「変容」と「笑み」が見られた実践でした。

効果的な話し合いのために、大平先生は予め様々な手立てをとっていました。例えば、

- ① 「命」について学ぶ学習を全5時間で計画。命の連続性や有限性、かけがえのないものであること等について各自の考えを深めてきている。
- ② 手術すべきか否かに議論を焦点化した上で、立場を選択し、話し合わせる。
- ③ 意見を全て書いてからではなく、途中まで書いたら話し合う学び方の積み上げ

といった意図的・計画的な働きかけがありました。

さらに、充実した学び合いの背景には、大平先生の確かな指導技術がありました。

- ① 丁寧な資料提示、構造化された板書
- ② 子どもの様子に目を配りながらの範読
- ③ プリントを配布したら最後の一人の手に渡るまで待って話を始める間の取り方
- ④ 丁寧に板書し教師が書いているチョークの先に注目させる
- ⑤ 明瞭・簡潔な発問と待つ姿勢
- ⑥ 座席表をもって反応を拾いながらの机間指導
- ⑦ 子どもと正対して話をしっかり聞く姿勢

等々、投げたボール（指示や発問）の行き先をしっかりと見届ける先生だと感じました。

また、この姿を反映して、子どもたちも姿勢を正しくしてよく聞き、よく考え、よく話し合いをしました。そして、分離手術をするべきか否かについて話し合う際には、「たとえ、手術をすれば1人助かるとは言え、わずかな時間でも2人が生きている時間には意味があるから、簡単に手術を選べない」等、深く考え話し合うことができました。これは、大平先生が「黒板が埋まったら終わり」

ではなく、意見が黒板に出そろってから「さあ、討論しましょう」と、より考えを深めていこうとしたからこそ出てきた意見でした。



事後の討議でも「普段の取組の成果が子どもの姿として現れている」「先生も子どもも言葉に無駄がない」等の意見が出されました。また、学習問題や資料についてたくさん質問が出て、大平先生のこれまでの取組について聞くことができました。

さぬきの授業 基礎・基本 II-2「話し合う力」を育てる指導 「話し合いの苦手な子どものためにひと工夫する」とは？

中学校第1学年 理科 「種子をつくらない植物（植物の世界）」

視点II-2「話し合う力」を育てる指導の実践提案は観音寺中 太田浩生先生。

本実践の概要：シダ植物の観察を通して、種子をつくらない植物の存在について話し合い、シダ植物やコケ植物は、胞子で増えることを理解する実践。

子どもの気づきがたくさん表出された実践でした。特に、子どもの気づきを重ね合わせ、教師の「教えねばならぬこと」と子どもの「学びたいこと」を摺り合わせ、学習問題に導く姿に、太田先生の指導技術の高さを感じました。

まず、太田先生は、5種類の種子を配り、気づきを自由につぶやく場を設定しました。やはり、実物は強い。子どもは、大きさや形、色などに目を付けて、それぞれの種子の違いについて積極的につぶやいていました。そこで、「何のために種子があるのですか？」と発問し、逆に共通点に目を向けさせました。

そうすることで、いずれの種子も、子孫に命をつないでいくために必要不可欠なもの、という意識を顕在化させました。そこで、種をつくらない植物があるという事実に出合わせます。これまで学んできたこととのギャップに、子どもは、「どうして？」「それはどんな植物か？」「どのようにして子孫を殖やしているのか？」と、どんどん問いかけました。このように、認識のズレを明確にし、子どもの疑問から「種子をつくらない植物はどうやって殖えるのか」という学習問題に設定することで、後の話し合いも活性化しました。

話し合いを活性化させるための様々な手立てがありました。まず、「聞く」「話す」の学習規律が徹底されていたこと。注目すべき場では、間をとって必ず聞く体制をとらせてから発言を求めています。また、個々に実物を用意し、考える手がかりが手元にあったことも有効でした。実物を丹念に観察したことを根拠に自分の考えを創っていく大切さを感じました。さらに、3人グループでの話し合いでは、発表者、記録者、司会の3役を10秒で決めさせ（いつもしているからできるのでしょ）一人一役を与えることでスムーズに話し合いが進行しました。



授業後の討議は、若い先生方の質問を中心に展開され、「学習規律徹底のためには、進度を気にせず、きちんと立ち止まること」「座席表の上に実験器具を返却させることで、管理がしやすくなる。」「理科ノートは、板書計画や豆知識などを書き加えている」などのアドバイスが心に残りました。さらに、討議後もあえて準備して提示しなかった教材を巡って熱心な話し合いが続きしました。



中学校第3学年 学級活動「ストレスと上手に付き合おう」

視点Ⅱ-2「話し合う力」を育てる指導の実践提案は、大川中 明石 英敬先生。

本実践の概要：ストレスについての正しい認識を深め、適度なストレスは必要であることに気付き、ストレスに対して自分なりの方法で対処する態度を身に付ける実践。

学級活動2の基本的流れである「つかむ」「さぐる」「見つける」「決める」「実行する」を踏まえた授業設計でした。個に寄り添い、素の姿を引き出すという、話し合う土壌としての支持的な雰囲気づくりは、特に「つかむ」「さぐる」「見つける」段階で効果的でした。

「つかむ」段階では、「今の気分を測りましょう」と、簡単な計算をする前と後で、気分がどう変わるかを数値で自己評価する場を設定しました。気分は、少しのことで変化するものだと気付かせていました。

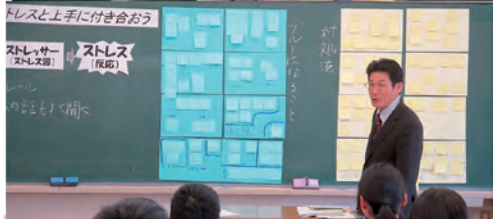
次に「さぐる」「見つける」段階では、青の画用紙に「ストレス」を書いた青色の付箋紙を貼り、黄色の画用紙に「自分の対処法」を書いた黄色の付箋紙を貼ります。そして、それらを種類別にまとめるなど、**子ども個々の意見を可視化、操作化、構造化できるようにすること**で、問題の意識化・共有化につながっていました。

4人グループでの話し合いでは、抱えているストレスやその解消法について、子ども全員が意見を出し合い、次第に、本音の意見が表出されていきました。子どもは「自分だけでなく、皆も同じストレスや悩みをもっていることが分かり、うれしかった」という感想をもったようです。

このような子どもの育ちの背景には、明石先生のきめ細やかな配慮がありました。**思春期特有の難しさに加え、高校受験というストレスが大きくなる時期故に、子どもが自分を振り返ることができるようになるまで時間をかけて関わり、待つことを大切にしていました。**机間指導においても、「分かる、分かる」、「目に浮かぶわ」と共感し、子どもの「伴走」に徹しました。

また、個の考えを全体に紹介する際には、記述内容が「ストレス」という個の弱みにかかわることに配慮し、名前を伏せて教師が紹介していました。

討議では、学級全体が温かい雰囲気でき、日頃の子どもの信頼関係がよく築かれており、考えを記述することに対する安心感が学級に満ちていることが評価されました。「普段、子どもにどうかかわっているのか」「保護者とどうかかわっているのか」「学活でどんなことをしているのか」といった、本時に見られた子どもと先生との関係を支える「常」について、活発な意見交換がなされました。



さぬきの授業 基礎・基本 II-3 個に応じた指導

「授業前に子どもと教材を把握する」とは？

中学校第3学年 技術・家庭 「幼児の生活と遊びを知ろう」

視点II-3 個に応じた指導の実践提案は、国分寺中 野村 幸恵先生。

本実践の概要：幼児への思いが伝わるようなおもちゃの構想（形、色、大きさ、デザイン、機能）を友人のアドバイスをもとにまとめ、見通しをもった製作計画表を作成する実践。

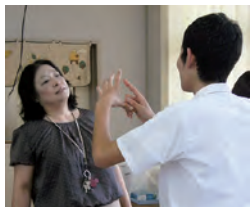
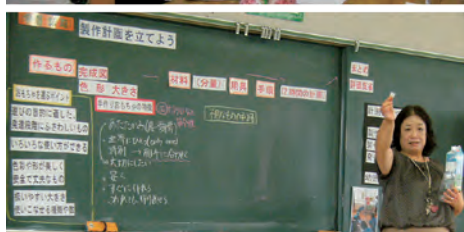
入室してきた一人一人が、野村先生に話しかけて席に着きます。教師への信頼と授業への期待がうかがえました。穏やかな雰囲気が高い、1班6人掛けの机で2、3人ずつが和やかにおもちゃの製作計画を相談していました。困った時にどう解決するか（友達・教師に相談、資料コーナーの活用等）を一人一人が理解しており、自立して問題解決に取り組めていました。

野村先生は、作品製作の「達成感」以上に、どんな思いで何を作るかという「考える過程」を大切にしていました。その背景には、3年間の「弁当の日」で子どもが学んだ「思いが人を突き動かす原動力になる」という経験を、より多く味わわせ実感させたいという野村先生の願いがありました。

また、学習課題を明確化した上で、個々に対応して、多様な支援を行っていました。

- ① 学習の流れの中で最適な発言ができるような効果的・意図的な指名と、発言の背景を補足説明
- ② 自力解決の場で自由に活用できる資料コーナー（図書、材料、作品モデル、園児とのふれあい体験の写真）の充実
- ③ 互いに検討し製作計画を見直せるように、似たおもちゃの種類によって班を編成

これらの支援は、毎時間子どもの自己評価を短い言葉で表現させ、3段階評価を加えた記録を積み上げてきたからこそ、個に応じたものとなるのだと思いました。ワークシートへの赤ペンコメントの積み重ねも子どもの励みになっていました。また、個人課題を十分把握し、いつ、どこで、誰に、どのような支援を必要とするか「全体指導・教室環境・個別指導」の明確な授業プランを構想していたことで、「自分は子どもの頃運動をあまりしなかった。幼児は運動することで体の成長発達が進むので、球形のおもちゃを作って遊ばせたい」「一緒に安心して使える材料を選ぶように気を付けたい」等、子どもは素直に自分の思いを語り、計画づくりを進めることができました。「弁当作りと同じで、相手のために、『こんな子どもになってほしい』『自分の思いを伝えたい』という気持ちを大事にしましょう」という助言も光りました。



討議では、「支援が必要な子どもを瞬時に見抜いていた」「個々に異なる製作物は、自分の思いを大切に意欲を高める価値がある」「各コーナーの準備がきめ細やか」「3年間の教科の指導計画が綿密に練られており、指導内容が明確」等の意見が出されました。

小学校第5学年 外国語活動 「What's this?」

視点Ⅱ-3個に応じた指導の実践提案は、**十河小 池浦 明子先生**。

本実践の概要：英語で3ヒントクイズを出し合うことを通して、自分の好きなものや大切なものについて尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ実践。

“I know ～.”と、積極的に挙手する姿が印象的でした。間違えてもいいんだ、という温かい雰囲気の中、子どもたちは、進んでコミュニケーションを楽しんでいました。

きっと、池浦先生自身が分からないことをALTに尋ねたり、大きな声で発声したりすることにものおじせずチャレンジしているので、子どもも自然と何とかして相手に伝えようとする姿勢が育っているのだと感じました。

また、事前に丹念に実態調査し、「指名されても何と答えたらよいか分からない」「説明が聞き取れない」といった子どもの困り感に寄り添い、ヒントカードを準備したり、ワークシートや板書に表現の手がかりを示したりしていることが、大変有効でした。さらに、困った時に立ち返ることができる環境（ICT、教具、掲示等）があることが子どものチャレンジする気持ちを後押ししているようでした。

また、先生がいないグループにおいても、自分たちでコミュニケーションを進めており、学び方が着実に育っていました。特に、赤白帽をトーキングオブジェクトとすることで、赤白帽をかぶった者に発言権があることが明確になり、問題を出題する、回答する、のやりとりがスムーズに進んでいました。

表現に困っている友達に、先生が準備していたヒントカードを示して助けようとする子どもがいたり、定型文に加え、

“One more hint, please.” “Gesture, please.”
等と臨機応変にアドリブで気持ちを伝えようとする子どもがいたり、「伝えたい」「分かりたい」という目的意識・相手意識が育っていました。



討議でも、英語での活発なコミュニケーションが図られました。ALTとのチームワークのよさや5本の指を使ってのアクセントの指導、「f」と「v」の発音の違い



に気付かせる指導などが評価されていました。

さぬきの授業 基礎・基本 II-3 個に応じた指導

「子どもを学習に向かわせる教師の関わり」とは？

中学校第3学年 英語 「New Horizon English Course3 Unit6」

視点II-3 個に応じた指導の実践提案は、三豊中 寶積 ゆかり先生。

本実践の概要：“1 Minute Reading”で集中力を高め、教師自作の英文にグループでタイトルを付けたり、後置修飾の系統を復習した上で練習問題を解いたり、Perfect Drill にチャレンジしたりする実践。

「はやっ！もう終わってしまった！」

終わりのチャイムと同時に発せられた子どもたちのつぶやきから、本時の充実ぶりがうかがえます。ぴんと張り詰めた空気の中で集中し、しかも笑顔でコミュニケーションを楽しむ子どもたちは、密度の濃い1時間にとっても満足しているようでした。

寶積先生は、凛とした姿勢、話し方（声量、声の高低、抑揚、テンポ、リズム）、時間の使い方、例の示し方が素晴らしく、子どもが心地よく学べる学習空間を意図的につくっていました。

例えば導入ではテンポ良く“1 Minute Reading”を行うことで、子どもたちの集中力を高め、目標をもって前向きに取り組む心構えをつくります。そして、説明や指示を英語で行う際は、子どもの反応を確認しながら、簡単な英語に言い換えたり、ゆっくりと繰り返したりし、最後まで英語を聞き取らせるようにしていました。また、寶積先生はほとんど全員に発言を求めます。発問1つ1つを子どもたちは注意深く聞き、一人一人が答える準備をしようとしていました。一人一人の意欲や学習到達度を踏まえた意図的な指名は見事で、どの子どももしっかりと考えて発言することができていました。「何が」「どう」よかったのかを具体的に価値付けしていることも大変効果的でした。さらに、内容に応じて全体、グループ、個人での活動を取り入れ、それぞれに細かなステップが設けられていました。グループでの話し合いでは、英語をコミュニケーションツールとして位置付け、英語を学ばせるだけでなく、グループ活動やペア活動において、英語を通して励まし合ったり心を合わせたりする交流を大切にしていました。また、グループリーダーをうまく機能させるなど、伸びの見える子どもへの支援も時間のかかる子どもへの支援も、学び合いによって両立させていました。

心が動く新聞記事を中学生に適した英文に作りかえて教材化したり、全員に課すオリジナルドリル“Perfect Drill”を作成したりと、先生自身が授業づくりを楽しんでおり、子どもにとって英語を学ぶよいモデルになっていると感じました。



討議では、「自分が心を動かされるものしか提供しない」「英語はあくまで道具。人間を育てることが1番。されど道具は使えるようにしっかり磨く。」等、寶積先生の信念に参加者一同、深い感銘を受けました。



Ⅲ おわりに

総合授業力リーダーの先生方には、授業を公開するに当たって、次のようなお願いをしました。

(1) 3つの「わ」がある授業を

わくわくの「わ」、わらいの「わ」、そして、わかるの「わ」。いわゆる「研究授業」をイメージして新しい提案性のある授業を試みるよりも、「示範授業」をイメージして、少し肩の力を抜いて伸び伸びと普段着の授業をお願いします。リーダーの先生方が当たり前としか感じられていない匠の技を、暗黙知として眠らせるのではなく、「公の言葉」に顕在化し、香川の宝として伝承することが、本事業の本質です。参観する先生方が元気になる授業を期待しています。

(2) 「さぬきの授業 基礎・基本」第Ⅱ章の具現化を

そのために、「さぬきの授業 基礎・基本」の活用をお願いします。本時の授業が成立する要因のいくつかは、必ずこの中にあるはずですが、それを計画書作成時に、予めピックアップしていただき、参観の視点としてください。昨年度は第Ⅰ章を具現化していただきました。本年度は、第Ⅱ章の「考える力を育てる指導」、「話し合う力を育てる指導」、「個に応じた指導」の中から1つ選び、授業を観る視点を明示してください。

(3) 育った結果より育てている過程を

育った結果よりも、今まさに育てているところを公開していただく方が、参会者の学びは大きいはずです。参観の先生方は、「分かった」「できる」という声が飛び交う授業より（これも素晴らしいですが）「分からない」「できない」子どもに、いかに手だてをうっているのかを見たいと感じています。

(4) 事後討議では、本時に至るまでを日常の積み重ねを

事後討議では、授業者による授業説明の時間と参観の先生方からの質問に答える時間をたっぷりとってください。通常の研究授業の事後討議のように「成果と課題」が討議の柱になるのではなく、「本時の、あるいは普段の、どのような授業者の営みが、本時を成立させているのか」を明らかにすることが討議の目的です。本時を支える普段の教科経営、学級経営、教材研究等について、蓄積してきたノウハウや独自に開発された教具等の具体物を示しながらのご説明をお願いします。

(5) 参観者の発言しやすい雰囲気づくりを

若い先生方の参観が増えることが想定されます。「どうすれば、このような子どもが育つのだろう」という問いが発せられるよう、ワークショップ型の討議を取り入れる等の工夫をお願いします。

総合授業力リーダーの先生方には、見事にこの期待に応えていただき、参観の先生方に、さぬきのよい授業のイメージを伝えていただくことができました。明日からすぐ真似てみたい授業も、いつかはやってみたいあこがれの授業も、その両方を示していただいたことに、心から感謝しております。

本冊子が、日々の授業改善の一助となることを心から願っております。

